岩手県立大学社会福祉学部紀要　第２号（1999．８）81―87

近代の福祉に生きた女性パイオニア（その２）

―― フローレンス・ナイチンゲールとジェーン・アダムス ――

鈴　木　真理子

Woman Pioneers Who Lived for Modern Socialwork (2)

―― Florence Nightingale and Jane Adams ――

Mariko　SUZUKI

第１章　二人の生い立ちとその家族

It is likely that the characteristics and the personal traits of individuals are influenced by their careers, usually their parents and other people who raise them, as well as by the societies and cultures where they grow up. The relationships of the causes and effects in the personal traits are not simple, but it is often found that great achievements and the talents of the famous people are led by their mothers' affection and guidance, while the vicious behaviors in the histories are rooted by unhappy family backgrounds, low self-images and critical comments.

In this chapter, we would look at the indications of possible humanistic sensibilities and missions in the childhood experiences of the two heroines, focusing the close relationships to their fathers who had intellectual impacts on them. As it is said that family is fatal, Adams, for example, formed a strong bondage to her father and so－called "father－complex" through her experience of a loss of her mother in her sensitive childhood. Nightingale had conflicts with her mother in her adolescence and became withdrawn, exhibiting the symptoms of neurosis. Their introspective tendencies and conflicts, however, made them energetic and patient in challenging and accomplishing pioneer and most difficult work of the settlements and nursing education. Their personal lives in the young days were not considered happy but suffering from identity-crisis in adolescence. However, the two were able to establish settlements and nursing education, which were needed in the American society of new immigrants and labor movements as well as in the English society of class conflicts and modern wars.

Thus, Adams found settlement activities for the poor people in the ghettos as her life work. Nightingale decided to become a nurse, which was a new occupation for women.

1　家庭環境と子供の頃のエピソード

―幼少期こそすべての人格の土壌―

すべての個人はその時代と社会の産物であると同時に、その養育者、多くは両親の生き様、人なりから多くを受け継いでいる。それは人間がその遺伝子や深層心理の奥底に人類の歴史10万年の推移を組み込んでいるように、一個の個人のパーソナリテイは先天的素質に、養育を通じて身近な存在からの物心つかないうちの長年の有形無形の働きかけの蓄積（これを刷り込みとも言う）から形成されたものである。それゆえ、単純な因果律ではないが、歴史的偉業の数々もその源を探れば、幼き頃の母親の愛情溢れた育て方によって引き出された才能であったり、逆に後世に語り継がれる悪徳の数々も不幸な家族環境と傷付き歪められた自我や攻撃性に萌芽を見いだせることが多い。

そしてジェーン・アダムス自身も序文を書くに当たって、「私自身の生育歴と私が人生の荒波の中に漕ぎ出したハル・ハウスの歴史との間で、区切り、分けるものは何もない。というのは、精神というものは連続して、他からの規制や経験に対して柔順に絶えて行くものであり、両者の間に断絶を考えることはできなかったからである」[1]と述べている。それは多くの苦難を歩んで来た熟達した目で、過去をたどってみて自分の生涯の一貫性に気付いて言えることである。しかし一般的人物の場合、無名と名をなした時点の境界に運命や宿命の大きな影響を読み取りたくなる傾向も多い。

―父親からの愛情と薫陶―

アダムス自身、父親の翼のもとで魂としての世界観を培った少女期から社会での使命を模索して悩んだ青春期を通過し、イギリスのアーノルド・トインビーに習ってシカゴでセツルメント活動に乗り出した時点でさえ、それが生涯を懸ける事業と確信して始めたわけではなかったと謙虚に述べている。「ハル・ハウスの初期の頃は、時間は活動の方向を決定し、活動の中に必然性を見いだすことはできなかった」[2]

誰しもが大事業に手を染める時、大冒険に一歩を踏み出すとき、何かしら神聖なる啓示や衝動につき動かされるとばかりは限らない。人生と必死に取り組んでいる人ほど、常に海図のない航海に出航するような気持ちで、新たなことに挑む。それらの業績の歴史的価値や運命の巡り合わせのようなものは、むしろ幼少期のエピソードの中にヒントが与えられていることが多いようだ。アダムスもその例外ではない。

人生50年で事業の土台を築きあげた目で自らの生い立ちを振り返って意識にのぼってくる思い出は、やはり現在への見えぬ糸、予言、暗示がちりばめられている。そしてアダムスの自伝の第１章の書き出しが、まさにこのことを象徴している。

「私達の感情は本質的に幼児期の体験に関係があり、人の性格もまだ形をなしてない、ただ将来への方向だけを決定する、いわゆる『まだ誰のものかわからない土地』の時期までさかのぼらなければ理解できないという説にしたがって、私はこの記録を子供の頃の印象から書き始めよう」[3]

この慧眼の背景は、その時代を風靡した精神分析の影響だけとは限らない。それは運命を切り開き時代を越える使命を帯びた人物によく見られる、優れた深い直感力、歴史が選んだ者がもっている非凡なる魂とつながっている。アダムスの自伝における最初のエピソードは、社会正義に殉じる者にふさわしく初代大統領ジョージ・ワシントンと良く似ている。桜の木を切ってしまったというだれも咎めない自分の嘘への良心の呵責に苛まれ、その罪を父の前に告白し心の安堵を得る体験である。

「まず思い出すのは、昼間嘘をつきベッドに入ってから思い悩んだ『恐怖の夜』のことである。惨めなぞーっとする死の恐怖に悩まされた。（中略）それは地獄に落ちている恐怖と私が欺いた大人の世界の代表である父が、告白する前に死ぬのではないかという恐怖であった。その恐怖から逃れる道は、父の部屋にいってすべてを告白することであった」[4]

真っ暗な寒い廊下と階段を上って、父の部屋にくじけそうな勇気を奮い立たせて訪ねる５歳のいたいけな少女に、父親は「嘘をつく娘をもったけれど、そのために眠れなかった娘もわが子であることがうれしい」という安らぎと評価を与えたのであった。

「私は許しをもとめなかったし、また受けもしなかったが、自分の邪悪に対する責任を分担されたように感じ、この厳かな言葉の裏にある愛情をほのかに感じるだけで十分であった。」[5]と書いているように、彼女の人格形成の土台は父親の影響が大きく、その節目節目に父親の存在がある。

この強烈なファザーコンプレックスそのものの少女

は、読書家の父親をまねて村の図書館の本を読み漁り、父の尊敬する友人のリンカーンに疑いなき忠誠と憧憬を傾けた他、善悪の価値観の規範、教養と精神面のあらゆる影響、陶冶を父親から受ける。フロイトのエディプス期におけるエレクトラコンプレックス[6]をひもとくまでもなく、この傾向は世に出て大事業をなし得た歴史に残る女性の多くにみられる。[7]20世紀前半の男性支配時代への余韻でもあるファザーコンプレックス、それが父権の喪失とともに失われた現代、女性は自由になったというより、規範たるべき存在を失ったと言えるだろう。

―愛の模倣により受け継ぐ父の理想―

「愛情は愛する人を模倣するという形をとる。それは年令とともに繊細な明確な表現に変わっていく。そのはじめの模倣は全く純粋なものであった。『自立』の人に捧げる若い世代の不器用な賞賛を私なりにおこなったにすぎない」[9]アダムスのファザーコンプレックスは、精神的良き面だけでなく、不器用で素朴なほほえましい形でも見受けられる。

父親の長年の粉引きの労働によって摩滅してつるつるになった指に憧れ、自分の指紋を消そうと躍起になったり、粉引き屋の主人になることを熱烈に夢見たり、町の有力者で人の注目の的である立派な父に自分のような醜い娘がいることを恥じて、大通りを一緒に歩くことを避けてみたり、銀行からでてくるシルクハット、コート姿の父親の姿に恍惚として見とれ、自分を認めて合図してくれたことで感情の高まりと緊張に見舞われるなど、その愛着の強さは彼女の向上心の源になっていく。そしてその憧憬の対象として期待に常に応えて、彼女を導く力を備えた父親の人格もまた娘の思慕に値するものであった。互いにそのような父と娘をもてたという意味で、この二人は実に幸運な親子と言わねばならない。馬車でのドライブで森を駆け抜けながら道に迷ってしまった父親が、熟練した勘と経験によって道を見いだした時、ジェニーは父の男らしい頼もしさに感嘆し尋ねた。「あなたは何者ですか。もし誰かが尋ねたらなんと答えますか。」「私はクエーカーだ。もしもっと詳しく答えるとしたら、一人の田舎者のクエーカーと答えよう」[10]この飾らない答えこそ、父親の人となりをよく表している。

1844年、アダムズの両親は新婚旅行で定住地を探して旅をしている時、この地を約束の地として永住を決意した。その際、新天地に故郷の松林を再現しようと故郷ペンシルバニアから携えてきた一袋の松の種子を撒いたものが、大きく成長して住居の周囲の森となったのである。

このように父親のジョン・H. アダムスは、キリスト教徒の中でも農民や下層に多い一宗派であるクエーカーの貧しい農夫の息子として育った。小学校を出るとすぐ製粉所に徒弟として住み、それこそ身を粉にして働いた。朝から夜中まで重い袋運び、機械操作、配達、集金と休みなく働いて、知力と体力を養い、その正直さと勤勉さ、才覚によって雇主の信頼を得るに至った。22歳にして主人の義理の妹との結婚を許され、当時の開拓者の若者らしく自分たちの新たな可能性の土地を探して、妻の持参金と10年間の賃金の蓄えをもって旅にでたのである。

数カ月の間、ペンシルバニアからイリノイ州北部の開拓地を馬車で旅をしながら、肥沃なシダール川の河畔に差しかかった時、そのゆったりと流れる川面、どこまでも続くなだらかな緑の丘陵の景観、そして豊かに肥えた地味に約束の土地として強く引かれるものを直感した。近くの村には、遠縁の家族も入植しており、二人は定住することにした。まだ入植者たちが定住し始めて10年もたっていない発展当初の町シダービルは、６マイル先にフリーポートの町を控え、富と可能性を求めてやってくる農民、職人、商人の活気で溢れていた。幌馬車や徒歩で入植した農民たちは、夜露を凌ぐ住まいを建てねばならない。その建築用の材木を丸太から作る製材所、また広い耕地から収穫される小麦を小麦粉という商品にする製粉所、これに交通手段の馬の蹄鉄をつけるかじやなどは、そのころの町の発展に欠かせない基幹産業であった。父親のジョンはまず古い工場を買い入れ製材所を始め、家を建てる人々に木材を売って利益を上げた。ついで定住した農民たちが畑で小麦を刈り入れる頃には製粉所を始めてまた多くの利益を上げた。このように、ジョンの才覚と勤勉さは土地の発展の勢いに助けられ事業はみるみる拡大し、着々と財を築くとともに人望も篤く町の有力者となっていく。

しかしクエーカー教徒らしく富のみに執着せず、学校、教会を建て、図書館に多額の寄付を行うなど町の文化の発展にも多いに貢献した。経済面では町の最初の銀行の頭取を務め、地域の産業発展の動脈となるシカゴユニオン鉄道の敷設に尽力した。その先見の明と

誠実さで、州の政治においても1854年の共和党の設立に加わるほど頭角をあらわした。人望も厚く、その後16年間上院議員として活躍したほどである。その政治的立場は友として尊敬賛美するリンカーンと志しを同じく奴隷廃止を訴え、自由と平和を重んじた。とはいえ、クエーカー教徒という宗教的立場から、北軍を支援する行動も自ら戦うこともできず、実業家らしくイリノイ州管轄の会社を設立経営し、北軍に多大な経済的援助をして功績を認められた。この進取と合理性に富む実践的傾向は、多分にreformer（社会改革者）として単なる社会運動家のように見られがちであるアダムスにも、初期のセツルメント活動創設期の事業家としての合理性に受け継がれている。

―満たされなかった母への愛着―

一方母親のサラはジョンより５歳上の姉さん女房であったが、その当時、また中西部域には珍しく、フィラデルフィアの寄宿学校に勤めた経験をもつ教養ある女性であった。年上とは言え実社会で経験を積んで年令より成熟したジョンとは、釣り合いのとれた夫婦であった。ジョンが外で着々と実業家、政治家としての地盤を築く間、サラは次々と生まれる子供と家族のため、家事と家政に明け暮れていた。その時代の典型的結婚生活同様、子供の躾や使用人の監督など、留守がちな夫に代わって多忙な毎日であった。しかも医者も少なく衛生環境、薬のない時代の多くの母親が経験するように、９人の子供を産みながら、そのうち５人を幼いうちに亡くすという不幸を味わっている。アダムスは９番目の子供として生まれ、ジェニーという愛称でよばれたが、病弱なため幼児期脊椎カリエスを患い、後遺症として僅かな背中の湾曲、首の傾きなどが残り、思春期の容姿コンプレックスともなった。また青春時代もあまり健康とはいえず、生涯を通じてその病弱には苦しむことになる。

しかし幼いジェニーの最大の不幸は、３歳前に母親の死に遭遇することである。近隣の妻たちの相互扶助の一大イベントであったお産、その手伝いに身重の身でありながら駆け付ける途中、転んでしまったのである。その衝撃で早産を誘発し、一週間後、母親はあっなくこの世を去った。まだ人間とも動物ともつかない、一番甘えと保護を必要とする時期に母親を失ったことが、内省的性格と父親への傾斜に一層拍車をかけることになる。アダムスの写真から感じられる、重々しくも寂しげな沈鬱な表情は、この辺に起因しているのではなかろうか。

母親の死後２人の年の離れた姉と兄、乳母がジェニーの世話に当たるが、姉や兄は寄宿学校に入っており、一番ジェニーがなつき愛着をもったのが、13歳のマーサである。しかしそのマーサもジェニーが６歳になった時、はやりの腸チフスであっけなくこの世をさり、再び見放される恐怖を味わう。その上、母親が実家からつれてきてそのまま娘たちの世話に残っていた乳母のポリーもジェニーが15歳の時亡くなる。臨終に付き添っていたジェニーに、母親の名前「サラ」と呼びかけたのが、最後であった。

このようにジェニーの幼少期は愛着をもつ者への死による別れ、残された者の喪失感と常に背中合わせであった。しかしこれらの時も人間の死について、父親と話し合うことで心の安らぎを得ることができたと語っている。「父はこのような時でも何が大切で、何がささいであるかよく見極め、死についても私の相談にのってくれた。わたしは人間の深い問題についても、話し合える父によって新しい友を得たように感じられた。」[13]

そしてそのような不幸に常に雄々しく立ち向かった自分の経験から、子供の精神の無限の可能性について次のように述べている。「子供や若者たちを死と悲しみから守り、人生の不幸が間もなく訪れるという不安から守り、いまだけでも楽しく暮らさせてやろうとする大人の努力に対して私は反対したい。若者はこの大人の態度に反発を感じている。彼らは人として誰でももつべき人生の経験からのけものにされ、見くびられていると感じる。かれらもまた急坂をのぼり、涙を流して自分のパンを食べたいのである。悩みの中で強い力でおしてくる生存の問題も、このような人生の大事件の光の中で解決の糸口をつかむことになることを彼らは知っている。」[14]

また「生命のもつ不可思議な落とし穴」である死について幼いながらも胸が膨れ上がる憤りを覚えながら、同じ村に息子全員を南北戦争の戦死や捕虜で失った老夫婦の深い悲しみに共感を感じたことを記している。「人生の最も不可思議な解くことのできない謎についての暗示が与えられたような気がした。人類のすべてが負わねばならない神秘的な罪、私はそう感じた」[15]

このような人類全体の罪や責務を引き受ける素質をもったアダムスの魂は、その身近なモデルを父にもとめ、もう一段高いモデルをリンカーンに投影した。父

親のリンカーンに抱いている尊敬がそのまま、娘に伝承された。リンカーンから貰って大事に保管されている手紙の束から、その偉大な政治家の息吹にふれ、ウイスコンシン州議事堂にてリンカーン像のある聖ペテロ寺院のドームを訪れた時、その建築物の荘重さを通して大いなる英知を学んでいる。「子供というものは自己の周辺の現実に対する理解は遅いが、象徴の意味を直感的に把握するということには、いかに敏感であるか」[16]

この直感によって、ジェニーは高貴な願いにすべてを捧げる努力が人類の太古から行われてきたことを理解し、自分のともすれば自己を失いそうになる子供心に勇気と忍耐を受け入れること教えられた。その経験はいきいきとした感動とともに、リンカーン像に偉大さと善の象徴を発見させたのである。

このように人間の価値につき、神について、貧困について、運命についてあらゆる形而上的な疑問や命題について議論し、答えの方向を示すのは父親であった。贅沢な衣服を日曜学校に着ていこうとして戒められた思いで、「この世で一番大切なことは自分の心に忠実であること、精神の統一である」とことあるごとに説いてくれた思いでなど、父親の支配や押し付けではない教唆は数限りない。

そしてジェニーの将来を暗示するようなエピソードとして、7歳のころ父親と町の工場を訪問した経験がある。工場のある隣町は、住んでいた田舎からすれば都会でいささかの羨望を抱いていた。「私にとってとくに魅力的だったのは、その町の中できらびやかなおもちゃ屋や菓子屋のある通りだった。同時にその日私は不潔そのものの都市の貧民街をはじめて見た。そして農村のたくましい貧困者と、都市の惨めな貧困者との間にある奇妙な差異を感じたのである。私は父にこのような狭くみすぼらしい家になぜたくさんの人が住んでいるのか、としつこく尋ねたことを覚えている。」そしてなぜかジェニーは異常な決意をもって「大人になったら勿論私は大きな家をつくるわ。でも他の場所ではなく、このような狭くみすぼらしい家の多く建っているところにつくりましょう」と宣言するのである。[17]

―ナイチンゲールの育った時代と階級―

さてナイチンゲールの幼少期はどうであっただろう。ナイチンゲールとアダムスのもッとも大きな環境的差異は、アダムスの育ったのは中部アメリカの開拓者精神と活気に溢れ、自然と自由と可能性に満ちた気風が充満している中流家庭であったが、ナイチンゲールの時代のイギリス、ロンドンは都市の過密さ、そして逼塞した階級社会と不毛の社交の退廃が支配していた上流家庭であった。アダムスは多少の束縛はあってもかなり自己に忠実に人生の道を求め、果敢に行動できた。しかしナイチンゲールにおいては、女性は社交と教養、遊びの享楽的無為の生き方を期待され、周囲、わけても家族が桎梏のように束縛する中で、独自の人生を選択するのは至難の業であった。だからこそナイチンゲールが自分の求める道を歩み始めるには、多くの忍耐の時間と堅固な意志を必要としたのである。

ナイチンゲールの生涯(1820年―1910年)は、英国がもっとも繁栄したビクトリア女王の治世1837年から1901年を挟んでいる。この時代は工業化の波が押し寄せ、工場では機械が導入され生産力が飛躍的に増加し、それが英国国力にも反映して７つの海を制覇し、日没のない帝国と言われるほどであった。それまでの貴族や地主階層に加えて、工場経営者や金融業などのブジョワジーと言われる中産階級が富を蓄え、華麗な有産階級として上流社会を形成していた。

地主階級とはそれぞれ現在の東京の一つの区にあたるぐらいの領地をもち、村や町を領有している領主であった。小さな地主でも小作人に土地を耕させ、その地代で働かずとも十分贅沢な暮らしができたのである。これら３％に満たない上流社会に議員や政府上級官吏、名誉職も占められており、ナイチンゲールの両親もこの階級に属していた。これに商業取引での金持ち、工場経営者などがブルジョワジーとして加わる。全体の２割り弱の新興資本家は、運輸業、農場経営などで上流社会に食い込んでいった。そのほか中流には専門職として弁護士、医師、教師、教会関係者など、そして新しい専門職として土木技師、建築家、会計士などが進出参入していった。

下層階級としては、劣悪化する都市の工場の労働者や家内制工場の雇われ人、小規模な店舗、市場で商いをする職人や商売人の下層階級、そして事故や病気にあうと職を失いたちまち浮浪者になる賃金労働者の貧困層に大きく別れていた。

ナイチンゲールの若い頃、中流階級が上層と下層に区別されていき、その下の労働者階級も熟練工と非熟練工に分化し始め、社会全体が貧富で真っ二つに分割された時代と言われる。これら中流階級の中では、馬

車をもっているかどうかなど生活様式や収入の差異だけでなく、不労所得階層と勤労を美徳とする階層との間で価値観により一線が引かれるようになる。

アッパーミドル（上中産階級）は大勢の使用人を雇い、社交、レジャーに浪費することが可能であるが、ロワーミドル（低中産階級）は熟練労働者と開きがないほどで「圧迫され生活の苦しい中産階級」とナイチンゲールもよんでいる。アダムスがハルハウスを始めた1850年代のアメリカは、独立戦争後100年でイギリスが300年かかった社会変化を成し遂げ、都市化の波が急激に押し寄せた時期と言える。

―両親の溝と家族のきしみ―

ナイチンゲールは貴族ではないが、大地主の何不自由ない上流家庭に生まれた。父親のウイリアム・エドワードの家系はロンドン北部、馬車で2日ほどかかるリーハーストに広大な領地をもつ（地主）ジェントリーで、母方の父ウイリアム・スミスは国会議員を40年務めた名門であった。この二家族の縁は深く兄弟、姉妹同士がそれぞれ結婚しており、親類の付き合いも一層緊密なものであった。

その時代の上流社会の新婚旅行は長く数年をかけて、太陽と歴史文化の豊富な大陸を巡るのが習わしであった。ナイチンゲールの両親もご多分にもれず、イタリア、ナポリで姉のパーシノープ（ギリシャ語でナポリのこと）をもうけ、次の年にフローレンスではナイチンゲールをもうけた。姉妹の名前はうまれた町の名にちなんでいる。ナイチンゲール家は旅行中に4人になって、領地のリーハストに帰ってきたが、父親は早速相続した古い館を大きな邸宅に建て直すことにした。ここダービシャーのマトロック近辺は美しい田園風景が広がり、夏は緑があふれ、自然の肥沃な土地であった。ナイチンゲールは少女期の夏を毎年ここで過ごすことになる。この高台に建てられた石造りの館と庭園は、今なおその優雅な姿が残っているが、屋根や窓の形など、父親ウイリアムの設計によるものであった。このように父親の建築好きは自分で設計や図面引きまでするほどで、その品格と荘重さを重んじる趣向はリーハストの館、後のエンブリーの改築に凝らされている。この数学的、建築学のセンスは、後のナイチンゲールの病院設計、統計マニアとなって片鱗を表す。

父親ウイリアムは政治や実業の中央舞台で活躍することはあまりなく、領地や邸宅で読書や自分の趣味に静かに勤しみ、娘のラテン語や数学の勉学を見るという地味な生活ぶりであった。このリーハーストは冬の寒さが厳しく、幼い娘の冬の健康と、まだ田舎に引っ込むには若過ぎる妻ファニーの気晴らしのことを配慮して、冬用の住まいとしてロンドン南部のエンブリーにも館を求めた。フローレンスたちが5歳になったころから、この二つの家を毎年行き来するのが、ナイチンゲール家の習慣になるが、またロンドン社交界に楽しみを見いだす妻のファニーのため、秋と春は必ずロンドンで過ごすことも例年行事のひとつであった。

「私は以前高価な家具のしつらえられた、ロンドンの豪壮な邸宅にすんでいたことがある。部屋の天井は聳えるように高く、窓も向かい合わせて二ついており、しかもそんな部屋を2つも私一人で占領していた」[18]

二人の幼女をだきかかえて肖像画に収まっている若い母親ファニーは、確かに美しくはあるが、大変外向的、はで好きな典型的上流婦人で、地味で思索的なウイリアム、そしてどちらかと言えば父親似で文才と分析力に富むフローレンスとの性格の不一致が、後々家族の間に亀裂を生じさせることになる。

フローレンスの1つ違いの姉とは、ごく小さいころは一緒に遊ぶことがあったものの、人形やおしゃれの好きな姉は母親似で女の子らしく、それに比べて動物や自然の好きな冷静利発なフローレンスとは次第に個性の差を明白にしていった。

領内の羊飼いの犬で羊の番をするコリー犬の膿んだ傷を手当して見事治したこと、馬に乗るのが大好きで専用のポニーを飼っていたこと、小鳥の死を悼んで悲しみの詩をつくって小さないとこたちとお葬式をして墓に葬って遊んだことなど、多くの動物好きのエピソードが伝記に語られている。また村人や身内の者の病気の看病、貧しい人への同情と援助活動などフローレンスの後の看護の仕事へ情熱を傾けるきっかけとなるエピソードも数限りない。

フローレンスが少女期にその率直な人柄になつき、勉学の素質、社会への関心を引き出してもらったのはクリステイー先生という若い家庭教師だった。結婚のため惜しまれてナインチゲール家を出て2年後、難産で命を落としたという知らせにショックを受け、自分に何もできなかったことを心から悔やんだことなどが、後看護婦への意志を固めさせる。その他、社交界デビューの準備やお洒落より村の病人の世話に楽しさと充実感を感じたこと、祖母の病気を看病して直したことや乳

母の臨終を看病しながら看取ったことなど、少女期に自分の進むべき道を自覚するまで多くの看護にまつわるエピソードが見いだされる。

10代前半のナイチンゲールは、家族の中で母の期待に応えにくい自分とその自分に陰ひなたとなって味方してくれる父親、それに相対する母親と姉との二勢力の家族分断の間でもまれ、苦しむ葛藤で心身を擦り減らしていた。つまり感受性の鋭い思春期によく見られる、青春の自我同一性の危機[19]の淵に立っていたというべきかもしれない。自分達の享楽的生活のペースに引き込もうとする母と姉に対抗し、自分の部屋に閉じこもり書き物をしたり読書に時間過ごすことが多くなった。健康的にも顔色もすぐれず、食欲もなくなり、生気がうせて日常生活に支障をきたす程で、現代の家族病理である、家族間のしがらみや軋みや歪みに敏感な若者、自己を主張しにくいメンバーがその犠牲となるノイローゼの一種である。上流階級の閉鎖性と生活のための労働がない逼塞感が、余計その無気力の傾向を助長した。

しかしその傾向を心配した両親は、エンブリーの館を大改造する間の期間を利用して、年頃の娘の社交界デビューに一層磨きをかけるため、一家で二度目のヨーロッパ旅行に出けかることにする。娘の気分転換を願って、藁をもつかむ思いであったのだろう。

註

1）「ハルハウスの20年」　序文　２頁
2）　同　本文　２頁
3）　同　４頁
4）　〃　２頁
5）　〃　２頁
6）　〃　１頁
7）フロイトのエディプス期のエレクトラコンプレックス精神分析の重要な概念でギリシャ神話のエディプス王の物語り（父を殺し母を娶るという予言者の道を歩んでしまう）からとった異性の親への無意識の性的な愛着をさす。女子の場合の父親へのコンプレックスをエレクトラコンプレックスと呼び、どの文化圏にも普遍的に存在し、幼児期にこれらを克服して思春期に入るとした。
8）インド独立に導いた国民会議派のネール首相の娘であるインデラ・ガンジーは、血筋を利用して長年首相を務め、パキスタンのブットー首相(1988―1990)はパキスタン人民党の創立者である父親の政治勢力をバックに、1988年総選挙で第一党となりムスリム諸国で初の女性首相となった。また日本では近ごろ衆議院議員に初当選した故田中首相の娘、田中真紀子など。
9）「ハルハウスの20年」　８頁
10）　同　６頁
11）　〃　11頁
12）クエーカー教徒17世紀イギリスのジョージ・フォックスが起こしたプロテスタントの一派でフレンド派ともいう。儀礼や聖職者を廃し、故人の内面的宗教体験を尊重する。質素、堅実、柔順な生活を旨とし、争い、暴力を否定し、戦争を拒否する平和主義と貫き、アメリカでは兵役を免れることができる。
13）「ハルハウスの20年」　14頁
14）「　同　」　14頁
15）　同　20頁
16）　〃　21頁
17）　〃　４頁
18）「看護覚書」139頁　現代社　1983年
19）フロイドの弟子であるアメリカのエリクソンが追及した心理学の概念で、主体的な自己意識であってそこから安定と自己肯定の感情、自尊心が生まれる。これがまだ定まらない時期を拡散期と呼び、アイデンティティクライシス（危機）とも呼ぶ。この宙ぶらりんの時期をモラトリアムと呼び、仕事もできず、ひどい場合には自殺、精神疾患にも陥ることもある。